

第5回 「記憶障害について」

Hi、みなさん。いかがお過ごしでしょうか。自分はすっかり日本の仕事のやり方に戻ってしまい、英国から帰国した当初に感じた日本の仕事は忙し過ぎるという感覚が随分薄れてしまったことを残念に思っています。英国では仕事 100%の人生は褒められる対象では全くなく、事実 100%にしない方が逆に成果が上がることも実感してきたのですが、なかなか難しいものですね。ここ最近は記憶力も随分落ちたなと感じているのですが、今回はこの記憶についてのお話をさせていただきたいと思います。

記憶の問題は、高次脳機能障害の中では最も頻度が高く見られる症状です。リハの視点でお話をすると、残念ながら記憶の機能を直接上げる方法はまだ見つかっていない状況で、代償手段の獲得、利用がその方法となっています。そして代償手段には、外的代償手段と内的代償手段とがあります。外的代償は頭の外にその手段を置くもので、代表はメモ、最近はスマホ等の利用がそれにあたります。一方、内的代償は、頭の中にその手段を置くものです。記憶法の工夫などがあたり、歴史の年号を語呂合わせで覚えるなどはその一例です。

留意点をいくつか挙げさせてください。一つは、脳外傷等の高次脳機能障害では、記憶の問題を考える際には記憶のことだけを考えるのでは足りないということです。高次脳機能障害では、各症状がお互いに関係するところが大きな特徴です。この点は次回に改めて話をさせていただきますが、記憶も注意力や情報処理能力の影響を受けるわけです。冒頭に申し上げた最近の自分の記憶力低下も単純に記憶だけの問題ではなく注意の問題が絡んでいると思っています。少し頭が疲れ気味なんですね、ハイ。

もう一点、代償手段の利用が脳機能を間接的に上げることがないのかという問題が、欧米では長いこと真面目に議論がされています。記憶の工夫をすることと記憶力が上がることは一見関係がなさそうですが、複数の神経が絡む高次脳機能障害では代償手段を用いても頭を使うことに意味があるようです。こうした点は、他の障害とは異なる、高次脳機能障害独特の部分と言えるかもしれません。

(Spring is really beautiful in Japan!)

(青木 重陽)